

■はじめに

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひします。今日は、まず映画監督である河瀬直美さんの動画を見ていただきたいと思います。



■河瀬直美さんの講演から

この動画は東京 TED における河瀬直美さんのプレゼンテーションです。この TED について少しお話をしたいと思います。TED とは、Technology Entertainment Design の頭文字をとったものです。学術・エンターテイメント・デザインなど幅広い分野の専門家による講演会で、第一線で活躍する世界の著名人を講師として招いています。講演は、数枚の写真を背景として、時には何も使わないで、自分の言葉で伝えたい思いやアイデアを語っていくというものです。本市でも「なら教育の日」で、TED のように自分の思いを語ることができないのかと考え、昨年 12 月 19 日になら 100 年会館中ホールで開催した「なら教育の日」記念集会では、「自分の思いを世界に！～グローバル人材の育成をめざして～」をテーマにしたプレゼンテーションを行いました。

今回の記念集会では、TED のように自分の思いを語ることができないか考えました。奈良市で学んでいる子どもたちが、一生懸命自分の思いを伝えようとしているその姿を、先生方だけでなく、保護者の皆さんや地域の方にも見ていただきたいと思い、3 人の児童生徒にお願いをしました。



プレゼンテーションをしてくれたのは、登美ヶ丘小学校 6 年生の竹村謙吾君、三笠中学校 1 年生の青木柚樹さん、一条高等学校 3 年生の駒川遥さんの 3 人です。校種や活動している内容は異なりますが、3 人とも海外での活動経験があり、今回はそのことをもとに自分の思いを語ってくれました。私は練習の様子を聞き、タブレットで撮ったりハーサルの映像を見せてもらっていました。はじめは自信なさげな様子で

でしたが、本番が近づくとつれて自信をもっていった様子がわかり、短期間でずいぶん成長したなという印象を受けました。

プレゼンテーションが終わってから、登美ヶ丘小学校の竹村君のご両親と、お話することができましたが、お母さんは、「成長したわが子を見て大変うれしかった」と涙ぐんでおられました。一条高校の駒川さんのお母さんからも、「いつも 8 割くらいの力で走っているわが子が、今回は全力を出し切った姿を見ることができた」と喜んでおられました。3 人と

も、短期間に何度も練習を重ね、当日も大変な緊張を感じながらの発表だったと思います。中でも三笠中学校の青木さんは、もともと人前で話をするのが苦手だったそうですが、今回立派に発表したことで自信につながったそうです。きっと、ひとりひとりが自分のからを一つ破ることができたのではないかと思います。このように子どもが活躍し、ぐっと成長できる場をそれぞれの学校で企画して作り出してほしいと思います。

今回のプレゼンテーションの講評は、文部科学省初等中等教育局国際教育課の葛城崇さんにお願ひしました。葛城さんは、楽天の社内における公用語を英語にされた方です。その講評の中で、葛城さんは「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である。(チャールズ・ダーウィン)」という言葉が引用されました。

私は、グローバル人材を育てていく上で大切な要素が 2 つあると考えています。ひとつは、アイデンティティの確立です。これはいつも言うように、どんな時代が来ようと、どんな舞台に立とうと、地域への誇りを自分の「根っこ」としてもつということです。もうひとつは、「自分の思いを語るができる」ことです。そのための道具として、英語や ICT を使いこなす技術も必要だろうと思います。グローバル化が進み、変化していく時代であるからこそ、我々もその変化に対応できるように今回の TED のような新しい手法も取り入れて、自分の足元を見つめながら生きていくことのできる子どもを育てて生きたいと思います。

■春日大社式年造替

さて、話は変わりますが、先日 1 月 5 日の仕事始めの日に、春日大社の花山院宮司とお会いし、お話する機会がありました。宮司は、「奈良の子どもたちに春日大社に関わる伝統文化を知ってもらう機会をもってもらえないだろうか。聞いてもらえるところがあれば、出向いていきたい」とおっしゃっていました。

春日大社と言えば、今年と来年の 2 年にわたり、第六十次式年造替という行事が行われます。式年造替は、春日大社では 20 年に一度行われる社殿などの本格的な修理事業で、神社の伝承では 770 年から始まったとされる、長い歴史のある行事です。式年造替と聞くと、屋根の檜皮をふき替えたり、社殿の柱をきれいに塗り直すことだという認識が強いのですが、それだけではありません。この行事で興味深いのは、文化財である社殿の修理だけでなく、神様に奉納する太刀などの神宝やお祭りのための調度品なども、ほとんどすべてが新しいものに新調されるということです。それらは伝統的な手法で作られるもので、多くの職人がその仕事に携わり、日本の伝統技術や工芸の技を注ぎ込んだものとなっています。



こうしたものを作る技術を身につけるには、長い修練が必要です。造替の期間が概ね 20

年というのは、そういった技術の修練や後継者を育てるうえで最適な長さとなっていると聞きました。例えば 20 才で初めて見習いとしてこの仕事に携わったとしたら、その 20 年後の 40 才になると仕事の中心となって働きます。そして 60 才のときには、経験を生かした教師として若い職人の教育にあたり、伝えてきた技をしっかりと後ろから見守る役になる、といったサイクルができているということです。



そしてもうひとつ、「神宝検知」という行事があることも知りました。神宝検知では作った職人さんを春日大社本殿の前に集め、その目の前で、出来上がった調度品が伝統ののっとりきちんと出来ているかを宮司さんなど神職の方がひとつずつ確認します。そして、素晴らしいものを作ってくれたことを感謝し、職人さんの労苦をねぎらいます。20 年ごとの技術の継承だけでなく、最後にはちゃんとそれを正殿の前で顕彰するわけです。式年造替という制度は、伝統文化や文化財を継承するために、大変よく考えられたシステムであり、日本伝統の教育の在り方という点でも興味深いものだと思います。

この式年造替は、20 年に一度の機会です。仏や神が、ということではなく、文化財、日本の伝統文化として、先生方にも見ていただきたいと思います。この機会にしか経験することの出来ない貴重な文化財や修理の様子、あるいは奉納される伝統芸能などに触れることは、私が常々言っている、「奈良を深く知る」という上で、とても大切なことだと思います。

そして、子どもたちにもこのことを学ぶ機会をつくってほしいと考えています。子どもたちは今回の経験があれば、20 年後にはもっと興味をもって、「深く知る」ことにつながると思います。機会あるごとに、奈良の歴史や人々が大事に思っただけで残そうとしてきたこと、奈良の歴史に、子どもたちを触れさせていただきたいと思います。

■おわりに

オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授らの研究（『雇用の未来-コンピューター化によって仕事は失われるのか』という論文）によると、10 から 20 年後には、今ある 702 の職種の中の約 47%が機械によって代わられるという予測があるそうです。しかし、どんな時代になろうとも、どんな世界を歩んでいこうとも、自分が生まれ育った地域や自国の文化伝統に誇りをもち、根っこをしっかりとった子どもを育てないといけないのではないかと思います。このことを確認して、奈良市の教育をお願いしていきたいです。本年もどうぞよろしく申し上げます。